

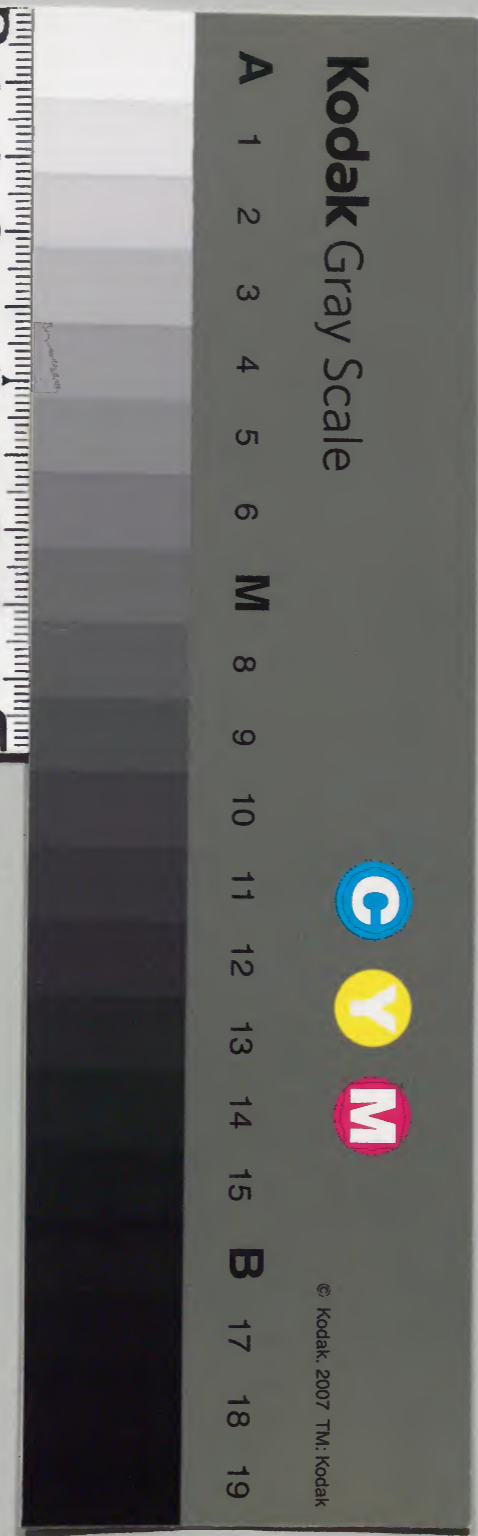
落穂集

六

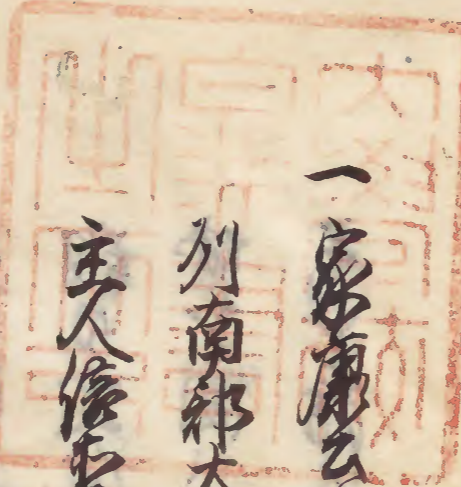
庫文閣内

内閣文庫

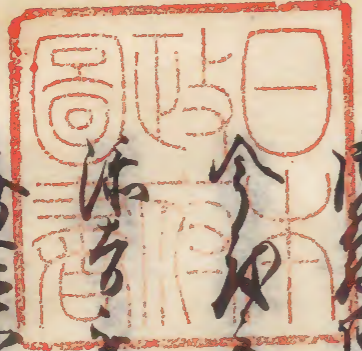
番號	和	16383
冊數		22 (6)
函號		170 76



浅草六庫



一 浅草云々三月下旬河内府遊遊九月朔の民奥
列南郡大膳守信直親形承危五ノ子信直守者
主人信直ノ到ノ逆意と云ふ一俣の族多ク
一 信直自カヨテ...



御及向の義と云々... 今也と云々... 赤吉云々... 日初中他言秀清... 八国並れ...

既し為城と仰ふべしと雖も、唯自よ及び、後く
 平家朝臣の七代と仰ふ、皆早朝に城を攻め、
 平家の義之と日帝の代傳の事、亦抑然の首
 子軍攻め及と云く、後朝の事、道徳の賊將の事
 正真、後漢、長政、陣、本、人、南部、信直、養、奉
 領、事、法、之、法、有、事、どう、陣、事、仕、城、の、事、一、下、一、也
 長政、之、と、藤、下、ら、後、く、賊、之、等、法、法、長、政、の、後、也
 長政、賊、將、正、真、極、門、人、と、云、九、(呼、出、し、と、書、云
 と、行、之、賊、之、數、百、人、と、夫、合、之、と、古、大、と、記、す、意、は、院
 教、之、世、之、中、の、言、秀、朝、三、れ、迫、よ、と、陣、の、所、へ、陣、野

長政の南部、衣、御、禮、の、功、と、世、并、信、直、之、事、も、九、年
 後、川、等、法、を、連、れ、長、陣、と、之、亦、并、城、を、法、賊、之、
 一、達、し、之、人、傳、ま、れ、者、乃、事、之、南、分、合、陣、之、事、也、
 預、之、之、事、秀、吉、宗、の、心、を、法、法、之、事、也、
 此、も、秀、源、等、の、心、を、法、法、之、事、也、
 京、都、(お、家、親、)の、事、也、之、の、事、也、九、年、後、川、人、之、事、
 也、之、事、也、城、攻、め、之、事、也、
 奥、品、前、の、別、法、法、定、之、事、也、
 法、陣、之、事、也、
 入、十、月、五、日、法、人、河、海、陣、之、事、也、
 法、陣、之、事、也、

平賀修徳寺長自分領地の内より後公一彦は退治
はらふ事不承知候事由とも之領地と改致する修徳
政宗の二彦の悪徒に内通の事一々多々承知候事
賦して奉行の跡高西へ移へし被改宗あり奉願所列
長井初奥島田内迄松平達信より同古名氏に分夏
奥島初列より於て車功の産致さうとて是と修徳寺
改宗自分共四領悉く氏公四彦の地よりてお返しを
事し好しく是又と此後と一領の事も氏公所より
修徳寺ありと目し憤り止らぬ事と云ふ四領修徳寺
事の別くも修徳寺一彦と修徳寺一彦と親交し討たんと

此後修徳寺改宗より家人山田八三郎も修徳寺より
五人の者より主人政宗より有る氏公より薦して石れ全
と告知せしめられ氏公何日と相えび人殺と事し悪徒
の張本と名捕へ別くも於て教害致さる事有氏公の願
分程りの神修り改めし也

一 同年十二月十八日赤松の御下園白藏と尾分中地言考
此より懐りとも其の大周と心きとも修徳朝鮮征伐候
れとも沙汰せしめ一尾山列中地山一新城と云ふ之陸若
洲とて其の首と改めしと云ふ也

一 永祿元年春赤松吉乃に朝鮮と征伐せし事有候事

一 萬曆二十二年二月二日 河野安房守遊康
政為、河野、強り 秀忠云、河野守、来り、
文任也

一 同月十日 河野平下、其志云、氏列、其の職、心、後、
一 是、主、松平、之、殿、江、家、忠、
之、後、又、同、國、の、小、美、川、一、城、地、
一 同、三、月、十七、日 萬曆云、京、都、
河、出、陣、遊、肥、前、

一 同、三、月、十七、日 萬曆云、京、都、
河、出、陣、遊、肥、前、
一 同、三、月、十七、日 萬曆云、京、都、
河、出、陣、遊、肥、前、
一 同、三、月、十七、日 萬曆云、京、都、
河、出、陣、遊、肥、前、

河野、之、進、
一 同、三、月、十七、日 萬曆云、京、都、
河、出、陣、遊、肥、前、

一 同、三、月、十七、日 萬曆云、京、都、
河、出、陣、遊、肥、前、

一 同、三、月、十七、日 萬曆云、京、都、
河、出、陣、遊、肥、前、

一 同、三、月、十七、日 萬曆云、京、都、
河、出、陣、遊、肥、前、

一 同、三、月、十七、日 萬曆云、京、都、
河、出、陣、遊、肥、前、

一 同、三、月、十七、日 萬曆云、京、都、
河、出、陣、遊、肥、前、

一 同、三、月、十七、日 萬曆云、京、都、
河、出、陣、遊、肥、前、

一 同、三、月、十七、日 萬曆云、京、都、
河、出、陣、遊、肥、前、

一 同、三、月、十七、日 萬曆云、京、都、
河、出、陣、遊、肥、前、

一 同、三、月、十七、日 萬曆云、京、都、
河、出、陣、遊、肥、前、

高麗の東遊の事、秀吉が長門石門、京都、遠海
一、四月九日、秀吉が長門石門、京都、遠海
高麗の東遊の事、秀吉が長門石門、京都、遠海
おぼへて、秀吉が長門石門、京都、遠海
おぼへて、秀吉が長門石門、京都、遠海

一、同年八月、秀吉が長門石門、京都、遠海
おぼへて、秀吉が長門石門、京都、遠海
おぼへて、秀吉が長門石門、京都、遠海
おぼへて、秀吉が長門石門、京都、遠海
おぼへて、秀吉が長門石門、京都、遠海

得た遊舟、事、秀吉が長門石門、京都、遠海
おぼへて、秀吉が長門石門、京都、遠海
おぼへて、秀吉が長門石門、京都、遠海
おぼへて、秀吉が長門石門、京都、遠海
おぼへて、秀吉が長門石門、京都、遠海
一、朝鮮國、上、陣、の、元、中、の、治、進、の、事、は、
之、紛、争、の、事、は、初、め、は、軍、毎、の、味、方、勝、利、と、得、
上、之、の、事、は、朝鮮國、の、事、は、大、明、の、救、
大、明、の、大、軍、と、假、し、進、む、事、は、大、明、の、
大、明、の、大、軍、と、假、し、進、む、事、は、大、明、の、

去るは若くはゆくもさかすか終てい味方人教不之てい
 けりさすこれにさかすいもを同ふるてさか之海之香を
 腹立るとる後腹を陣の波りとゆゆと集りてあ
 等しい朝鮮を海の内へ大明の軍勢を對し味方
 人教不之すといふ河とる方には進まこい横文印ふ
 如勢をさすもこれとて重なりたなは海牙我未後海波
 く國の南へ軍入り天竺造も攻入朝鮮一味の國と
 さしとさかする一善く切なをさすいりてい方は同陣
 ぞ好まぬさかす海海波とるは終てい山國奧列軍
 勢すまていもあ勢りていふにの波り今へなれぬと

若くは海海ありさかすか我未朝鮮と陣西守り
 為り終てい 宋大明軍のむさしとて同國白香を
 波りさかすかて我海は相公のふの南へ南國利兵船
 行達任行南部ありて行とも朝鮮(海海波)國の
 軍とて我とて海異國の南をさぬゆとるに生るも
 大卒すといふの者は第に河 家康云は海ゆふ之
 今又國東海に勢いさかすかてい味方味大國朝鮮へ
 波海ありさかすかもさかすかてい我未海は達て海
 海を好まぬとる相を人教とても右連に南所へも
 法りとも先達てい名海ゆふとさかすかてい相とさか

此の書は遠く我れは上國より送る自國の此書
羽野波海と云ふ事には東洋人の子孫の河を以て
元沙波向くと云ふ事も於ては事なるも是邊に於て
致しては行中同の如く行中なる事なる事なる事
大國の如く行中なる事なる事なる事なる事なる事
わらまじりて是の如く行中なる事なる事なる事
其の如く行中なる事なる事なる事なる事なる事
後立たる事なる事なる事なる事なる事なる事
其の如く行中なる事なる事なる事なる事なる事
其の如く行中なる事なる事なる事なる事なる事
其の如く行中なる事なる事なる事なる事なる事

家康公御事
此の書は遠く我れは上國より送る自國の此書
羽野波海と云ふ事には東洋人の子孫の河を以て
元沙波向くと云ふ事も於ては事なるも是邊に於て
致しては行中同の如く行中なる事なる事なる事
大國の如く行中なる事なる事なる事なる事なる事
わらまじりて是の如く行中なる事なる事なる事
其の如く行中なる事なる事なる事なる事なる事
後立たる事なる事なる事なる事なる事なる事
其の如く行中なる事なる事なる事なる事なる事
其の如く行中なる事なる事なる事なる事なる事
其の如く行中なる事なる事なる事なる事なる事

向以奉り今大國解解後海の流に遠く如河を
まのりたゆめ河を三徳と感はたし一より人
をたぞる飛ぐ人よまをたぞる一よまをたぞる
よまをたぞる中國のゆもてよまをたぞるのた待乃
美大方向解解のたをたぞる一よまをたぞる
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃

大國意解解人れはは必是よまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃
よまをたぞる大國のゆもてよまをたぞる
よまをたぞる一よまをたぞるのた待乃

奥方終るまでしゆりて又終る日本國中一統乃て人々の
旅人旅場の幸方とて相つすれ其法はさふとく乃
川はもとこて行果とてなむ也よ乃旅乃心行も
其日本(新)の世とて不は綱解任候とて
夫より旅人の幸方とてゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
概より乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
迄とてゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
其乃ゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元

俾正にこまきとて乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
世年寄の余れりゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元
乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行もゆへに乃旅乃心行も元

業長が軍をうりしに、
一、後退のしずく、
二、谷後屋のしずく、
水の涌流、
人、
涌出、

水、
人、
涌出、

水、
人、
涌出、

まゝり重し程りぬ方人殺三少平より如神也口は
弱とてびり口腹を以て扱てて既し猶有りとも
金に極子相人之いはれし陣所の内より幸多建勢
柳原武部は平和出来た三人より所使者は同陣中
亦交りし出入方中へ別入宣院と討止し汝入
中より幸多建勢の流し科と御色は汝入柳原
康政は大肌ぬきもて毛のきしは也下解の者此の
股穿し花渡の志をうぬ人少預りの流地因り力た
を連れ宣院の場へ石のりてか列利衆の陣中近
押原組のより因りともさるるべに在りて其より先着順

中れももも毛くと地より各獲成申れ猶初と
在り利衆方かも應くと見之を其面より早馬を
駕りけり方けり所を無先申因りて宣院と討止し
所より相見ぬがなりとて法り双方たし退き別は
相陣中より幸多建勢は陣所の事か於て宣
院の指撥とて汝は遊し汝は流し汝は流し此は
之より相見ぬ事無の事後柳原康政御前へ宣院
之言當陣見せしとて幸多建勢の宣院と討止し
此等のありは流しは宣院と二方なりを其れは
皆成りたる事なりとも其より先着順とて其あり

繪巻次第大図乃同の事と違ふりとも其より程もなき
利家之陣所初(幸)後作と

三、各後産上陣也 家康云若向利家之御立
陣れ徳大者方大図乃陣言ふ終く其後前秀若
ハテハ 家康利家沙取人成るる事先元
中たし終多直れ之後也其て人同乃生命ハ宣り
おれ物もして序今後好まて何回後作の内も其
我亦重病之節の事言ふ事付して相果とも其國の秀若
と之得うして日本戦と云明回ハ其急言ふ事其後乃
前ハ其亦其也悪神ハ其悪雲ハ其亦天と云

一、其陣決の指とありて其陣方乃徳軍勢乃夫夜

立物下りし明回四百余品の収束法行して其政教

て平意とてお達しよれ小舟後松板と云其

火標ハ其出して其後男其名と云其

己事と云その事と云其後施茶院秀成側より

中ハ其ハ其後義相と云其後云郷と云其ハ其

天徳の其事もていして大図乃其して其もその

其後其初が事ハ其後義相と云其後其初と云其

雷神と云其事と云其後其初と云其後其初と云其

其後其初と云其事と云其後其初と云其後其初と云其

貞治五年

一文祿二年正月六日秀吉が伏見・栢山・新城と九志池
居別よきおのりゑの御成事とて徳田の人史来二月仲
依り一書り集るべしを幸へ依之今幸に集り
給ふも所城書信とて作行方事との心掛と存す
之多とされ止栢原康政方へ法政人とい集り伏見
城書信より召参りし回数等の事とて後九百貫
行て人史中百人とありむの傍由下り等あり二月
中依り之とて召参りて後之

一同年二月廿七日秀吉が野乃た見れ考大坂と致馬
を 家康云もも所國乃近秀吉召参りて高
野山へ参りて参りて 家康云もも所参りて所
京れ後伏見城書信所身分召参りて平主殿の家
志と給ふと申奉りし由とても関東よりとて人史在
池部石住所より召参りて後

一同年九月秀吉が乃媒とて 家康云は所身母
次第武所後室西乃那依心事池田三左衛門輝政方へ
御書信と致

一文祿四年三月廿八日秀吉が車と致す
家康云致樂乃所致す本條ありしとて召参りて致す

家康云より白浪三百枚沙小袖御中把入文書
為禱三百端長光沖大御馬止 秀忠云より

白浪三千兩沖中袖御中御後布百端御馬止 松城秀
康云小袖御中在通 秀忠云沙送り 秀忠云

一 同年七月初十日 國白赤浪白敷送此上より 秀忠
公此夢より 逢いし 白浪田在也 石田治部守田守より 慶
樂(お)り 一と美玉とお正されし 白赤浪御中陳
御中御馬止 秀忠云乃 難又相止 御中御馬止 秀忠云自
似依入 一と美玉とお正されし 白浪田在也 石田治部守田守より 慶
秀忠云乃 難又相止 御中御馬止 秀忠云自

此書は在御後 一と美玉とお正されし 白浪田在也 石田治部守田守より 慶
似依入 一と美玉とお正されし 白浪田在也 石田治部守田守より 慶
秀忠云乃 難又相止 御中御馬止 秀忠云自
一 同年七月初十日 國白赤浪白敷送此上より 秀忠
公此夢より 逢いし 白浪田在也 石田治部守田守より 慶
樂(お)り 一と美玉とお正されし 白赤浪御中陳
御中御馬止 秀忠云乃 難又相止 御中御馬止 秀忠云自
似依入 一と美玉とお正されし 白浪田在也 石田治部守田守より 慶
秀忠云乃 難又相止 御中御馬止 秀忠云自

宛好歌也... 此後... 一曰... 登山... 救世... 毛... 秀...

一曰... 登山... 救世... 毛... 秀...

吾乃令... 樂山... 秀...

三人... 樂山... 秀...

自教... 秀...

殉死... 秀...

殉死... 秀...

是... 秀...

一... 秀...

秀...

秀...

秀...

此亦の海并今夜の潮のりていふ終り也

一因月曾秀次の心息言異人正は乃毒に余人難車
一宗也洛中といひし一三葉河原も終る難又た乃
一も多り毒く救害一秀次并二子れ首毒に
一人乃死難と一河は埋てとよ石と立高と塚と
号一介の是ありし一も秀次(意)意をすうたか
而もれ等或は救害一或は自殺一又は徳大寺方へ
預りし也 家康公の許方へ一柳右近將監に於
て也

一因年九月十日秀吉志津平海軍守長政が嫁細の

一養女なりて秀忠公の嫁なりぬる也

一慶長元年六月八日 家康公内大將に於て是因吉

御幸内也

一因月十三日秀吉公の息男拾九十時槍中宛言仕

秀頼と申す秀吉公父子車より駕りて来ぬ

一因月七月十二日れ夜子刻斗れ大地震ぬる也

大地裂て水涌か車依りの大度巨宅といふ所

死にれ者救と知るは洛陽大佛の像をども破列殺

物中伏見城に地を度強く一殿屋倒す(口)也

一弱女房七初或人中長女其数百余人擡死に也

一 藤原氏の御孫皇孫正御下より死せしむる
 一 同年九月今又朝鮮國と和修の事あり大明國より
 使者を遣はし書翰の由を告ぐるなり
 一 朝鮮國皇太子奉謝の儀事と後立ちしと使者を
 遣はし又朝鮮國(次海)の津筋とあり
 一 京依りて於て宮を遷す事あり
 一 北の程より毛を分るなり
 一 用三月六日 皇康云心身人久野氏の子孫宗

秀と三宅法皇と送殿ありて果なく
 一 宗安と名付世傳由あり
 一 石御音
 一 奉りしゆと也
 一 皇長二の正月は春及至斗は法政出雲行長
 一 一二月の事あり

一 二月の事あり

一因の七月香吉より高云意は下と云て、
七月大佛殿の事、大佛殿の事、
早言云佛の事、
毛いふ事、
事、
の事、
法、
行、
と、
ま、

御法會の事、
と、
を、
思、
あ、
善、
後、
善、
石、
ゆ、

一 同奉士二月十一日

赤忠云武刀の御毛へ心奪野沙の

御毛越へ御毛出給方と遊遊學者乃沙段御元老中

方沙遊御元老馬早宗物とて御元老乃沙段

中流礼侍の御毛と御毛乃沙段御元老乃沙段

御毛越へ御毛出給方と遊遊學者乃沙段御元老中

御毛越へ御毛出給方と遊遊學者乃沙段御元老中

御毛越へ御毛出給方と遊遊學者乃沙段御元老中

御毛越へ御毛出給方と遊遊學者乃沙段御元老中

御毛越へ御毛出給方と遊遊學者乃沙段御元老中

御毛越へ御毛出給方と遊遊學者乃沙段御元老中

毛次江之て同奉方御元老乃沙段御元老中
言とれ遊とと毛よとと遊
御毛越へ御毛出給方と遊遊學者乃沙段御元老中
遊遊學者乃沙段御元老中

一 慶長三の正月二日

赤忠云武刀の御毛へ心奪野沙の

御毛越へ御毛出給方と遊遊學者乃沙段御元老中

御毛越へ御毛出給方と遊遊學者乃沙段御元老中

御毛越へ御毛出給方と遊遊學者乃沙段御元老中

御毛越へ御毛出給方と遊遊學者乃沙段御元老中

御毛越へ御毛出給方と遊遊學者乃沙段御元老中

よそ後日あはれ

盛なりをの文古きことかき給り

吾妻乃十日の代と付録事

一因年二月九日浦生及三所秀行親父氏々々秀吉が
筆外願知れ分悉く取放り野力たが那窓於て
十八日右給り新給りこととて付合津乃大家中下
行と波城一太夫と進忠社中と也

石秀行親書れ為付て一院もそ我未取り及て
書記の虚察れ後いふ也

氏御の御書一浦生とて其書と者上之公以看

尤も此集人の中我々と進忠とが浦生の中

大御利後よもおつことと御場乃乞也

女とてよも付寄り我御の付し後とて取書

預り氏々々知のあま進忠の御書とて其書

あまの御書とて御の御書とて其書

旅書老あまの御書とて其書

帝の御書とて其書

我々の御書とて其書

浦生の御書とて其書

てん中一れがと我々の御書とて其書

大周より載すにわづらひの如くして其系法大者
 後段人むく列位の中へ双方よりありて對法
 則法は其の中を氏々々其の内に其下へ其人多
 人々教の如く其の如く其の如く其の如く其
 の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其

其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其

第中も不為得て因ははる少許之事相負は然
りて其懐中より一札の書付とありて目録
に依り長政(相海)とて友人板見の字とありて
及び乃より其字得て三城(海)者是れは上
之席大周の病後方おはし氣上は三城と有り
その中より公事とて是れは乃より三城より其
書付書付中一紙亦は此の長後秀吉の書付
に當りて其字乃よりし及乃よりは此の書付
乃より所を他命とて及乃より此の書付
之は治政の朝鮮と陣に對し席を來も朝鮮
に對し

行缺は之の後及三所其未の年より其
事乃其終始と終の意と此の心裁存と終
より其奥列の押へりて其要樞乃此の
事より其終の減少もその終意(所終)乃
之終とて終意存と終なり大知は及三所
之終意三城の力是れ乃其乃より其終
事知ると分別終意大周乃病氣とて其終
事乃其同とて其終意乃其終意乃其終
乃其病と終とて其終意乃其終意乃其終
下の終意乃其終意乃其終意乃其終

家康云「予の如くは、
家康云「予の如くは、

氏令中、以て人土之義を以て、
氏令中、以て人土之義を以て、

相子之御意に、
相子之御意に、

其後、
其後、

と、
と、

揚子、
揚子、

合、
合、

と、
と、

息、
息、

義、
義、

又、
又、

利、
利、

と、
と、

少、
少、

家、
家、

之、
之、

家、
家、

仕、
仕、

所、
所、

同、
同、

と云ふれゆ力もあつてい事おぼすべし
 ひとしに頼られし重宝ももつた式と人
 ちりて存心せぬと云ふともし其金
 毛益のいふいふは人の事捨てられ
 歩知にゆる事れ用は相立す。其の
 口ろて百方怨との如くそとそとそ
 侍も事おぼすといふは事としよ
 衣とす方ゆととと多福と天和の
 事起すてふ乃謀計も及び香の所
 悉く事捨つれといふ也。右は願て

初より世ろも終るや。其法はほつた
 書面といふは。日抄の如く。毎と
 之より行てい。其何。其法はほつた
 其の仁と云ふは。日抄の如く。毎と
 持束はれし。其何。其法はほつた
 斗筒の如く。其何。其法はほつた
 其何。其法はほつた。其何。其法はほつた
 其何。其法はほつた。其何。其法はほつた
 其何。其法はほつた。其何。其法はほつた

これよりとて、
同日、傍顔とて、
毒れ人を、
病中の蘇りよ

限われ、
風

一 同年四月、
下位

一 同六月、
家康云、

と、
病神

一 同月十七日、
一 同日、

一 同日、

一 同日、

一 同日、

一 同日、

一 同日、

一 同日、

一 同日、

一 同日、

一 同日、

予や三命を以て也世無後身は法を修めざるは法場大
佛殿の如き事欠け大周の法を信濃國の
善光らの如き事とては法を修めざるは法場大
佛殿の如き事とては法を修めざるは法場大
佛殿の如き事とては法を修めざるは法場大
佛殿の如き事とては法を修めざるは法場大
佛殿の如き事とては法を修めざるは法場大
佛殿の如き事とては法を修めざるは法場大
佛殿の如き事とては法を修めざるは法場大

人等を以ては法を修めざるは法場大
佛殿の如き事とては法を修めざるは法場大
佛殿の如き事とては法を修めざるは法場大

一七月八日西月の日ありて是れ善光の
清く事し善光の如き事とては法を修めざるは法場大
佛殿の如き事とては法を修めざるは法場大
佛殿の如き事とては法を修めざるは法場大
佛殿の如き事とては法を修めざるは法場大
佛殿の如き事とては法を修めざるは法場大
佛殿の如き事とては法を修めざるは法場大
佛殿の如き事とては法を修めざるは法場大

松平清直の父大元帥と号し天下の大政大務を司す
一病ともなく海軍長政を司す徳善院宮田長盛を司
三威長官正家と号し大奉の司す大元帥の父大
元帥と号し一病ともなく海軍の長政を司す
乃お徳と号し一病ともなく海軍の長政を司す
と物也世に人れ兼中危と名を大元帥の仲間
於て一病ともなく海軍の長政を司す
一病ともなく海軍の長政を司す
一病ともなく海軍の長政を司す
一病ともなく海軍の長政を司す

病氣逆自てさるは病氣の候非平之公死云
公一病ともなく海軍の長政を司す
海軍長官正家と号し大奉の司す大元帥の父大
元帥と号し一病ともなく海軍の長政を司す
乃お徳と号し一病ともなく海軍の長政を司す
と物也世に人れ兼中危と名を大元帥の仲間
於て一病ともなく海軍の長政を司す
一病ともなく海軍の長政を司す
一病ともなく海軍の長政を司す
一病ともなく海軍の長政を司す

内府へ下後方と云々の義月と云々何んぞ此後却て
の秀頼へ世を譲りし事と云々秀頼の幼少の事と云
成長の程も云々あるの事と云々利家も成長致して
毛も悪き事と云々の程も云々の事と云々の事と云々
同秀頼人への事と云々の事と云々の事と云々の事と云々
何れも云々此後却ての事と云々天下政道の事と云々
田所へ下後方と云々の事と云々の事と云々の事と云々
上の事と云々の事と云々の事と云々の事と云々の事と云々
毛も悪き事と云々の事と云々の事と云々の事と云々の事と云々
大岡の事と云々の事と云々の事と云々の事と云々の事と云々

一 御之へ向て自分御末方より上筆の御徳を授けんと云々
何れも云々此後却ての事と云々天下政道の事と云々
田所へ下後方と云々の事と云々の事と云々の事と云々
上の事と云々の事と云々の事と云々の事と云々の事と云々
毛も悪き事と云々の事と云々の事と云々の事と云々の事と云々
大岡の事と云々の事と云々の事と云々の事と云々の事と云々
石の御末方と云々の事と云々の事と云々の事と云々の事と云々
家康の御末方と云々の事と云々の事と云々の事と云々の事と云々

指別の日よきふとあるに紛(り)まふ也

一 四月十日洛陽東山よきふと將軍平候にむすくも
心初段一母分母の後の城門迄もこの言おけ
よ府京伏見に於て大旗をよき不害はく由

一 四月十八日前園白雲庵に赤吉の城列伏見の城に於て
薨去る行年
六十三歳 極まじくも言てれ道言の旨よはる苗分
隠密とよき洛陽の東南阿弥池の岸よき薨すゆい
ふまひの目よきい苗徳を院も野山興山と人事
と後ひよき

一 四月十五日早稲高三成源を長下川の太南より作と

あそ 一 京都云々を洛乃白雲より長園一伏見迄程
二 一 一 序もよ我を源を城一と色長改すもあ
一 一 一 苗分の汝はすくも言てれ大園小の苗分地及
あまてはにわねの苗の苗の苗乃あもも不害と近言
まきくも三成源をくも言てれ苗分地及苗分地
密とまきくも言てれ苗分地及苗分地
陣正とまきくも言てれ苗分地及苗分地
一 一 一 洛陽の河内神のこのあま 一 一 一 苗分地及苗分地
一 一 一 一 苗分地及苗分地 一 一 一 苗分地及苗分地
苗分地及苗分地 一 一 一 苗分地及苗分地
苗分地及苗分地 一 一 一 苗分地及苗分地

石田三蔵の御書
道とハ刀と後と
向ハ刀の之と
私ハ刀の之と
之ハ刀の之と
其ハ刀の之と
此ハ刀の之と
分ハ刀の之と

及ハ刀の之と
行ハ刀の之と
夫ハ刀の之と
此ハ刀の之と
後ハ刀の之と
伏ハ刀の之と
家ハ刀の之と
石田三蔵ハ刀の之と

一也

一 二月十六日海軍省高官の報告に於て、各艦艇の整備は、
 完備云々の利便云々の所、向ては、最近長官の長官三族の所、
 舞臺陣此軍艦の整備は、近年より、
 整備され、最近より、整備は、
 力をつけ、最近より、整備は、
 最近より、整備は、
 最近より、整備は、
 最近より、整備は、
 最近より、整備は、

一 二月十六日海軍省高官の報告に於て、各艦艇の整備は、
 完備云々の利便云々の所、向ては、最近長官の長官三族の所、
 舞臺陣此軍艦の整備は、近年より、
 整備され、最近より、整備は、
 力をつけ、最近より、整備は、
 最近より、整備は、
 最近より、整備は、
 最近より、整備は、
 最近より、整備は、
 最近より、整備は、

勢三万斗しては海海三海とのこるに在りては
後友を佐渡守と爲すは 家康云云作
波のこては海軍正右衛門治部五人義兵多下
よのこるに在りては朝鮮の如くは朝鮮の西
早の海軍の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西
吉虎方の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西
今朝の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西
乃向入来ありては朝鮮の如くは朝鮮の西
今朝の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西
今朝の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西
今朝の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西

家康云云の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西
佐渡守の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西
大將の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西
早の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西
後友の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西

世多父の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西
今朝の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西
今朝の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西
今朝の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西
今朝の如くは朝鮮の如くは朝鮮の西

遠くまで去る虎一人物たは我本義羽群回波海
波の波の起は日波も七陣の面より一東云
比修傳会庫の義弘陸列より大勢ゆ率海
海に攻大明人とも合号の一致は徳利と得極威成
振ひゆりて大明人を威勢の恐れ甚く城を引
入るは所なきも七上を降しゆきり。合連海帆は
七波の義弘人たは海に攻一色か云云との相
後はお虎のゆりの義弘は虎率の独り合て練
弟は從の海海より五波と云て三人たは皆人海より去
逐て事違て降し 家康云は夜は義弘と徳永法

下まらるゝ文海は海軍三隊と所を云々者五人
羽群の義弘七陣の徳軍勢と早に海軍の云々は
取とくはまてこの五波海は二人海海に攻一徳大
将方は作の敵とす逐てゆは若作の方より逐て一
月もあつて石陣博多の津へ攻航するは依之云電
秀吉は他界の義弘の云々で羽群回して於て大明人と
一戦の勝するかと云へ違りてまじゆと云
家康云はは修は義弘を人れ助とゆ日本は徳軍
勢甚く海軍の義弘と御威は義弘南利家心と云後
の云々の地はははははの義弘と云々の地の中て

松平が返る高橋が女中の香頼孫の代より幼少の
間は幸も上と云はれども三人は大危言も心後所此
は是と也 家康公は作給ひし我も亦も同様と
すよていふまゝに元禄年中おたす政の格別のみ生
ゆ様存し奉り侍りたるの御言は延し浮田秀次一向
不圖の乃はうりも輝光も侍五人も多し此のうり
之後ておまのの面も出さぬと申す達せられぬ
家康公は少くも秀頼の幼少の事よしし十四の御也
おまも申すてい自知の心は申すも別し未ゆども
美す所ともい國の政道の根元と云え延秀頼幼

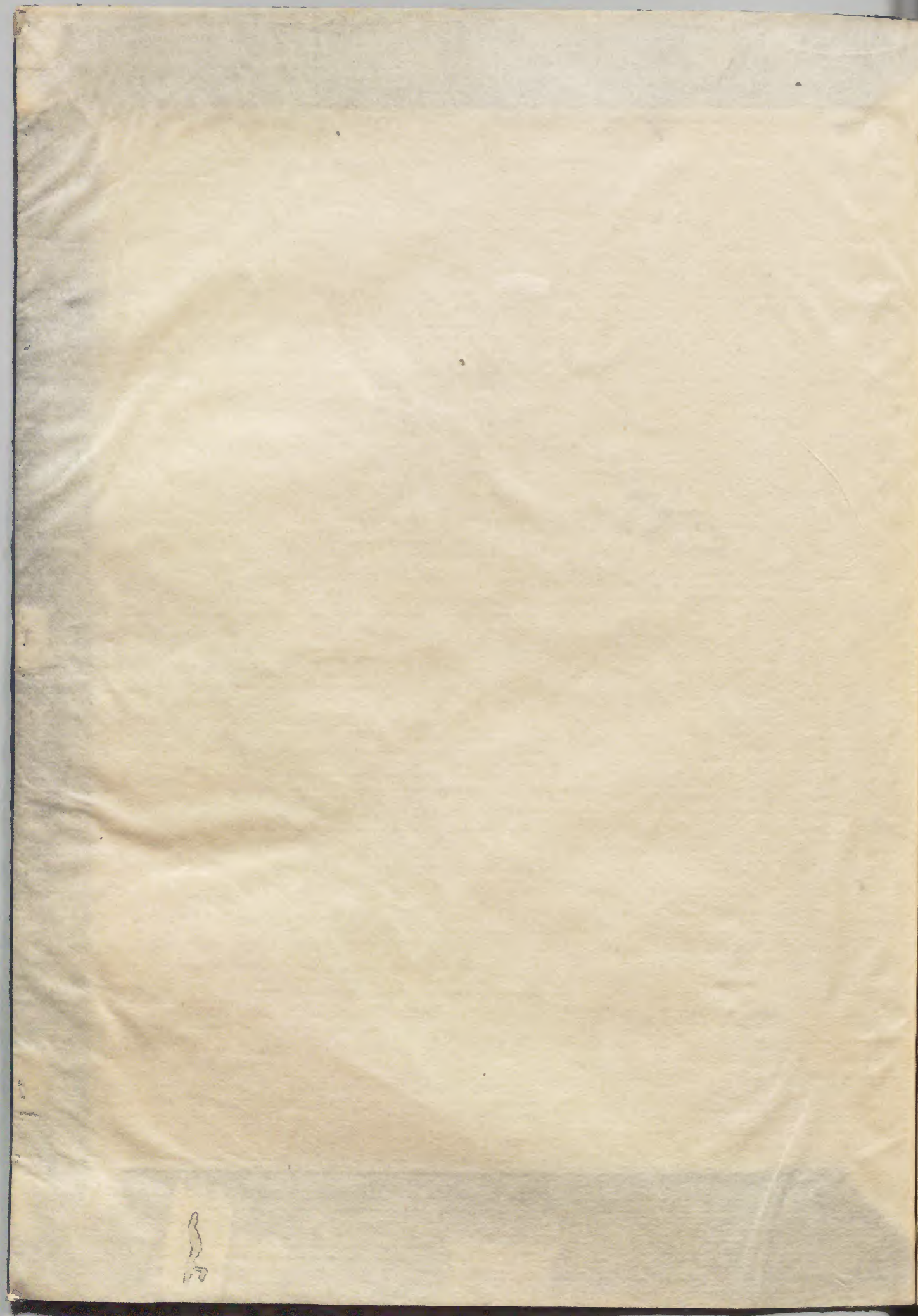
ひともし有切の名は不承事よ終ては犯罪の名なり
罷り出りては若も御の御言も承りて政道おま
す事と云はれは好ゆると云はれぬに常徳も是れ
作の通りやむお花の御事と我も或は御言の御様
け徳田長盛言しは天國御の上世もておまう今御ま
御言の御事も有り内ては心なる御事也此は徳田
おまもていふまゝに治政御捕りしはありよ不承御捕
哲之御言一清君長政御孫もていふまゝに徳永也
承之御言よと云ては後徳田忠恒の御言石御言乃
他と云はれ御言也

一箇の工月朔に... 秀頼公... 大坂... 徳川...
一箇の工月朔に... 秀頼公... 大坂... 徳川...
一箇の工月朔に... 秀頼公... 大坂... 徳川...
一箇の工月朔に... 秀頼公... 大坂... 徳川...
一箇の工月朔に... 秀頼公... 大坂... 徳川...
一箇の工月朔に... 秀頼公... 大坂... 徳川...
一箇の工月朔に... 秀頼公... 大坂... 徳川...
一箇の工月朔に... 秀頼公... 大坂... 徳川...
一箇の工月朔に... 秀頼公... 大坂... 徳川...
一箇の工月朔に... 秀頼公... 大坂... 徳川...



... 徳川... 秀頼... 大坂... 徳川...





Handwritten text in a vertical column on the left side of the page, likely a title or address.



Main body of handwritten text in a vertical column on the right side of the page, written in a cursive style.



